

『日陰者に照る月』のジョージとは

Josie on A Moon for the Misbegotten

田村 朋子

Tomoko TAMURA

1

『日陰者に照る月』(A Moon for the Misbegotten) (1947)は、作者オニール(Eugene O'Neill, 1888-1953)の家族を描いた自伝的作品『夜への長い旅路』(Long Day's Journey into Night) (1956)の続編でもあり、「『夜への長い旅路』と同様、『涙と血』"tears and blood"で書かれた作品」(Gelb 474)である。ジェイムズ・ティローンは、実兄ジェイムズ(James O'Neill)をモデルとしている。また移民二世で、アイルランド系アメリカン人(Irish American)であるオニールはアイルランド人気質を色濃くこの作品に描き出している。この作品は、評価が分かれ、高く評価される一方で、非常にけなされた作品でもある。

劇の場面はコネティカット州にある小作農フィル・ホーガンの家。三人の息子がおり、二人の兄はすでに家を出ており、兄を追って末の息子マイクも家を出るのを娘のジョージが手助けをするところから始まる。父と息子たちは、そりが合わず、「お前のおふくろの一族に似たんだ」(I-864)¹⁾と罵る。ここで思い出されるのは、『楡の木陰の欲望』(

Desire under the Elms)(1924)の父親キャボットと三人の息子たちである。キャボットもホーガンも土地への執着が強く、ホーガン家の息子たちと同様にキャボットの二人の息子シミオン、ピーターは父親の強欲さに耐え切れず、末の息子エベンに父の隠し金と引き換えに、自分たちのものにならないことを知った農場の権利をエベンに譲り家を出て行く。これらの「作品に登場する息子たちは、時に子供っぽさ」(Dubost 37)を感じさせる。父親と対決することなく諦め、尻尾を巻いて逃げていく。しかし、『楡の木陰の欲望』では、登場しなかった娘が登場し、娘のジョージは、息子たちとは反対にたくましく、オニールの今までの作品とは一風変わった存在感を示し、オニールの理想の女性像とも言われる女性として描かれる。

今回、理想の女性と言われるジョージの人物像、またジョージとその恋人ティローンとの関係、父親のホーガンとの関係、そして最後に、分析の結果、オニールは、理想と言われる女性ジョージをどのようなに描きたかったのかを考察していきたい。

2

まず、ジョージの外見的描写であるが、理想の女性とは言いがたい体型である。

Josie is twenty-eight. She is so oversize for a woman that she is almost a freak — five feet eleven in her stockings and weighs around one hundred and eighty. Her sloping shoulders are broad, her chest deep with large, firm breasts, her waist wide but slender by contrast with her hips and thighs. She has long smooth arms, immensely strong, although no muscles show. The same is true of her legs.

She is more powerful than any but an exceptionally strong man, able to do the manual labor of two ordinary men. But there is no mannish quality about her. She is all woman (I-857).

体型は大柄で、女性としては奇形に見えるほどで、力においてもよほど強い男でなければならず、男二人分の力仕事をする。しかし、ジョージには、男っぽいところはなく、どこからどこまで女性的である。また、顔についても、「美人というのではないが、大きな濃い青い目は、この顔をどことなく美しく見せており、笑うときれいにそろった白い歯が見えるのは、この顔の魅力になっている。」(I-857)と描写されている。Hallは、「ジョージは、理想化された母性的力のグロテスクな表象のようである。」(Hall 47)と述べている。体型から見るとまさにグロテスクである。しかし、母としての強さのごとく、父から息子を守るかのように、兄たちと同じように、マイクが家を出るのを手助けする。恋人ティ

ローンにとっても母としての強さと優しさで暖かく包みこむ。一家の柱となり、どっしりと構えた母親であり、ホーガンにとっても、妻のごとく安定した強さ、たくましさを持って支える。オニールの作品中の男たちが安らぎを求めるのは、『偉大なる神ブラウン』(The Great God Brown)(1926)のダイオンは、知的な美しい妻マーガレットではなく、暖かさが求められる娼婦シベルであり、『夜への長い旅路』のジェイミーは、「醜い大柄な女性で、ほかの男たちが相手にしないような娼婦」(Falk 171)に求める。これらの娼婦は、彼らにとって安らぎが得られる"Mother Earth"(II-500)²⁾「母なる大地」である。一方、キャボットは、外は煮えくり返るくらい暑さでも、家の中では暖かさが感じることができず、「牛小屋は暖かい — いい匂いがして暖かい」(II-344)³⁾と牛小屋に暖かさを求める。キャボットの求めたのは、ジョージが例えられた牛そのものである。ジョージはまさに牛のような、奇形な"freak"ぐらいの(I-857)大柄であり、自分でも「ぶかっような雌牛のような女だ」(II-915)と認めている。大柄な体型又どこからどこまでも女性的と描写されるジョージは、ダイオン、ジェイミー、キャボットの求めるものを兼ね備えた女性ではないのか。

ジョージの心と反比例したこの醜い体のため、わざと悪女ぶり、多くの男たちを手玉にとっている娼婦っぽさを装う。そんなジョージの嘘を父親のホーガンとティローンは見抜いており、ティローンは、ジョージの嘘を優しく嗜める。

JOSIE — *(as if he hadn't spoken)*
While I'm only a big, rough, ugly cow of a woman.

TYRONE — Shut up! You're beautiful.

JOSIE — (*jeeringly, but her voice trembles*) God pity the blind!

TYRONE — You're beautiful to me.

JOSIE — It must be the Bourborn —

TYRONE — You're real and healthy and clean and fine and warm and strong and kind — (III-915)

ジョージの振る舞いは男のようにあるが、心は外見とは反対に、相手の心を察することができる繊細な神経を持ち、また人情味溢れた母のような温かさを感じさせる人柄である。二人の兄を追って、家を出て行く末息子のマイクに、父ホーガンが隠していたお金を盗み、マイクに渡し、逃げる手助けする。また、マイクには、自分が世間では鼻つまみになっていることで、つらい思いをさせていることを感じ取る繊細さである。

一方、父ホーガンは、ジョージがホーガンから盗んだ金をマイクにやったことで、怒るが、彼女はほうきの柄を持って父ホーガンに立ちはだかる。ホーガンも「ああ、何たる災難だ、ほんとに、生まれた娘が雄牛のように大きくて強い、根性が曲がって親を親とも思わない、全く雄牛同然だからな。」(I-863-864)とジョージを雄牛のようだ、と言う。しかし、ホーガンは、そんなジョージは、自分と彼女(妻)の一族とは違うジョージの母に似て、骨があるやつだと喜ぶ。『楡の木陰の欲望』や『日陰者に照る月』の息子たちに対する強固な父権支配、それはキャボットもホーガンも農場への凄まじい執着から来るものであるが、娘のジョージには、微塵も感じさせない。しかし、キャボットと異なり、ホーガンには憎めない人間らしさがあり、二人は、息の合ったいわゆる漫才コンビのようで、二人のやりとりには、微笑ましささえ感じさせる。

ジョージの人柄には、外見からはうかがい知れない愛情、優しさ、人間味を感じ取ることができる健康的な肉体と精神の一致した女性として描かれる。

3

次に、ジョージとティロンの関係を考察する。地主のティロンに思いを寄せるジョージは、自分の体型の醜さのために、彼の前で、またあらゆるところで、素直な自分を出すことができず、あばずれぶっている。それは、ティロンに対してのブロードウェイの娼婦たちへの妬みの反動でもある。ホーガンは二人を一緒にさせようと画策する。マイクもまた、ティロンとの結婚をほのめかすものの、マイクは真のジョージを知ることはなく、彼を誘惑し、たぶらかそうという計略をジョージが考えていると思いつく。しかし、真の二人の姿を知るホーガンは、金のためだけでなく、ジョージの幸せも願うが、ジョージは、この父親の思い、愛情が理解できない。オニールの作品では、珍しい父親像である。

やっとジョージとティロンは二人きりになる。しかし、いつまでも偽善的な演技をするジョージに今夜だけでも素直になることを説得し、そこで、彼女は生娘であることを告白する。そして二人は、互いに愛を告白し、口づけをし、抱擁する。ティロンは、ジョージの求めに応じようとする。すると彼は酔って娼婦を抱くときのように、振舞ってしまう。そんなティロンをジョージは、拒絶する。互いの愛を成立させることはできない。「ジェイミーにとって、セックスとは、相手の女性がだれであろうと女性は娼婦なのである。」(Hall 49)ジェイミーは、母の遺体を運ぶ車中で、娼婦を買ったことへの罪悪感

がトラウマとなる。拒絶され、傷ついたティローンは、一人の女性としてジョージを愛することはできない。「おれは愛がほしくてここへ来たんだ — せめて今夜はと思ってな、だってあんたはおれが好きだと思ったから。」(Ⅲ-926)ティローンは、ジョージにほんとうの愛を求め、やってきた。しかし、ティローンは、母の遺体を運ぶ車中での自分の犯した過ち、母との約束を破ったことへの罪の意識から立ち直ることはできない。打ち砕かれて帰ろうとするティローンをジョージは、呼び止め、母親のような愛を持って抱きしめる。

JOSIE — (*watches him for a second, fighting the love that, in spite of her, responds to his appeal — then she springs up and runs to him — with fierce, possessive, maternal tenderness*) Come here to me, you great fool, and stop your silly blather. There's nothing to hate you for. There's nothing to forgive. Sure, I was only trying to give you happiness, because I love you. I'm sorry I was so stupid and didn't see — But I see now, and you'll find I have all the love you need. (*She gives him a hug and kisses him. There is passion in her kiss but it is a tender, protective maternal passion, which he responds to with an instant grateful yielding.*)

(Ⅲ-926-927)

ここで、ジョージは、一人の男を愛する娘ではなく、母親になってしまう。そうすることでしかティローンとは和解できない。彼に受け入れられるにはこの道しかない。オニールの作品中の息子たちは、幼い、子供っぽい、成長しきれない、母親の霊から逃れることの

できない男たちである。前述のイベントは亡くなった母の霊から逃れられず、父キャボットのしがみついた土地を「母の農場だ」と敵意を顕わにし、取り返そうとする。「ステージに登場しようとしまいと、母親は作品の中では、支配的な存在である。」(Dubost 57) ティローンもまたその一人である。ティローンはカリフォルニアで、最愛の母を亡くし、それまで禁酒していた誓いを破り、再び酒に溺れる。母の死の直前には、母との約束を破り酒に手を出したことを目撃され、母は見るのが辛く喜んで死んでいった、とジョージに語る。母が死んでも泣けない。母の遺体を東部への貨車に乗せる。母親の霊が出そうで怖くて、一人で個室にいられず、車中で見つけた娼婦を毎晩買い続ける。罪の意識に苛まれ、苦しんできたティローンをジョージは母親のように優しく包む。ティローンは、豊かなジョージの胸の中に顔を埋め、安らぎが与えられる。その姿は、ダイオンを思いださせる。ダイオンは娼婦シベルだけには、妻マーガレットには見せられない仮面をはずした素顔を見せ、互いに理解し、精神的なつながりを持つ。シベルは「母なる大地」的愛情を持ってダイオンを包み込む。同じように、ティローンにとって「ジョージは、もう一人のシベルである。」(Falk 175)

Haasは、次のように述べる。

A Moon for the Misbegotten shows O'Neill once again attempting to bring mythology into the drama. Josie Hogan, related to Cybel in *The Great God Brown*, but also in some details reminiscent of the heroine in the early play *Anna Christie*, is one of O'Neill's strongest female characters. In a disintegrating world, she

embodies health, strength, and an awkward goodness. Rooted deeply in the earth, she towers over all other characters, controlling the play as a symbol of maternity.

While he falls asleep in her lap, she is loving wife, mother, goddess of sleep, earth mother, and virgin all in one: "A virgin who bears a dead child in the night, and the dawn finds her still a virgin."(Haas 150)

しかし、一方で、「夜に死産する処女」と指摘する。『楡の木陰の欲望』のエベンはアビーと性的に結びつくことで、母親の霊から解き放たれる。しかし、ティローンとジョージーとの間にその結びつきはない。Shaughnessyもまた、「彼女は、愛情行為を示しているのではなく、『夜死産する処女の神秘』を示している」(Shaughnessy 184)と興味深い分析をしている。劇中ジョージーも「やれやれ、とんだ幕切れだ、さんざんたくらんでおいたのに。死人をしっかりと胸に抱いてここにすわってるなんて。月がばか面をして笑ってるよ、おかしくってたまらないのさ!」(Ⅲ-934)顔を胸に埋め、すすり泣く彼を抱きしめる。

ティローンは、「きっとお袋は、わかってくれる、ゆるしてくれる。そうだろう。いつもそうだった。おれのおふくろは、あっさりしてやさしくて心の清い女だった。それからきれいだった。あんたは心の奥深くでおふくろに似ている。だからしゃべったんだ。」(Ⅲ-932)とジョージーに語る。ジョージーは、単なる母の代わりではなく、罪を許してくれるもはや「母なる神」と言えるであろう。

ジョージーにとっては『恋人』から『母

親』への変化のプロセスは、たやすいように見えて、実は多くの犠牲を彼女に強いるものである。」(古木 17) 一人の男性を愛する女性としての「女」を捨てたのである。しかし、最後、その苦しさを吹っ切るかのように、成長したジョージーを見ることができる。それは、今まで通りの強欲な父との厳しい生活に立ち向かっていくことを選択したことにある。

4

では、娘ジョージーと父ホーガンとの関係はどうであろう。父と息子との関係とは大差がある。また父ホーガンは、珍しくユニークな暖かい人間味を感じさせる。3人の息子たちは、ジョージーの母親一族に似て、骨のあるやつはいなくて、また信心深く、感謝ばかりささげ、禁酒の説教ばかり。飲んだくれのホーガンにとっては、煩わしい存在である。

「アイルランド愛国者として、オニールは、小作農を卑屈ではなく、服従的ではなく、狡猾なずる賢い力強い人間として描いている。」(Raleigh 231) ジョージーは、母親に似て度胸があって、ホーガンとはぴったりと息が合う。そんな父を非難するマイクに向かって、「じゃ、父さんのことをとやかく言うんじゃないよ。わたしにとっても父親だからね。あんたはきらいでも、わたしは父さんが好きなんだ。」(I-858)と怒り、彼のあごに大きな手を命中させる。ジョージーとホーガンは息がぴったり合う。この関係についてRaleighは、次のような見解を示す。

Unfortunately, the genes of the wife's family were dominant in the creation of the rest of Hogan progeny, Thomas, John, and Mike, who are Irish Catholic Puritans, Grade B

— selfrighteous, church-going, abstemious, prayer-saying. These are the types who are easily and quickly assimilated into the working and lower-middle classes of America, But the real Irish, tough and full of spirit, like Josie and Phil, are intransigent and unassimilable and remain, so to speak, in Ireland, in the shack on the land with pigs and the potatoes, from which they… (Raleigh 232)

ホーガンにとって、アイルランドの血を引いていることは自慢である。そのため、「ほんとうのアイルランド紳士」であるティローンとジョージとの結婚を願う。また死んだ妻とそっくりのジョージの顔にはアイルランドの血を引いていることがありありとわかる。*Strange Interlude*(1928)では、父リーズ教授は策略をもって娘のニーナとゴードンとの結婚を阻止する。一方ホーガンは、策略をもって娘を結婚させようとする。「ホーガンは抜け目のない、下品なユーモアを持った、しかし優しい心を持った道化者であり、愛し合う二人を一緒にさせようとする一種の *deus ex machine* として、プロットの中では大きな役割を果たしている」(Falk 31-32)とFalkは述べる。ジョージはティローンの来訪を若い生娘のように着飾り待ちわびている。しかし、ティローンは来ない。そんなジョージを父ホーガンは、

HOGAN — That's right. Defend him, you pig soft fool! Faith, you're a prize dunce! You've had a good taste of believing his words, waiting hours for him dressed up in your

best like a poor sheep without pride or spirit — (II - 896)

とからかう。しかし、また

HOGAN — (*hanging on to her arm and shoulder — maudlinly affectionate now*) You're right. Don't listen to me. I'm wrong to bother you. You've had sorrow enough this night. Have a good sleep, while you can, Josie, darlin' — and good night and God bless you. (II - 897)

と優しくジョージを慰める。まさに、ホーガンの言葉は下品さそのままを表しているが、ユーモアがあり、優しさも兼ね備え、互いに理解し、相手を罵りながらも慰め合っている。一方のジョージは、家庭の中で大きな役割を果たす。

In many works, young women are required to replace their mothers, and they are consequently ascribed a special place within the family structure. In six plays (*A Moon for the Misbegotten, Gold, Strange Interlude, The Rope, The Straw and Where the Cross Is Made*), they are called upon to preside over destinies of their homes, … (Dubost 51)

母親が存在しないと、娘が母親の役割を果たし、兄弟姉妹にとってだけでなく、父親をも支配する、家族を取り仕切る、家庭では特別な、最高の地位を得ることとなる。娘ジョージの前では、ホーガンは父親としての威厳がない。すなわちジョージとホーガンとの

間には、父権支配など存在しないのである。ジョージは、3人の兄弟たちが、強欲な酷使する父親から逃れるために、また彼らの将来を考え、彼らの片棒を担ぎ、母親のするように、家から出る手助けをする。言うまでもなく食事の支度はしなくてはならない。*Mourning Becomes Electra*(1931)のラヴィニアは、ピーターのプロポーズを断り、母から父を守ることを優先する。同じように、ジョージは兄弟を強欲な父から守る。「娘としての地位は、まさに彼女を否定するに等しい女性としての地位より優先している」(Dubost 50)ことになる。ジョージは、ホーガンにとっては、仕事の良きパートナーでもある。よぼよぼの馬や病気の牛や豚を、手当てして一日か二日は元気にみえるようにして売りつけたり、大金持ちのハーダーは、自分の製氷池にホーガンの飼っている豚が入ってきて、柵を壊したり、水を汚すことに苦情を言うが、逆にホーガンとジョージの有無を言わせない巧みな戦術に負け、ハーダーは面食らい逃げ帰っていく。

この作品では、父ホーガンと娘のジョージには、息の合った、笑えるような、また微笑ましくさえ感じる場面が多い。ここで、印象的なシーンを一つ取り上げておきたい。

ジョージは、ティローンと夜9時ごろに待ち合わせをするが、11時を過ぎても彼は来ない。そこへ、飲んだくれ帰って来たホーガンとのやり取りが始まる。

JOSIE — (*shouts back*) Shut up your noise, you crazy old billy goat!

HOGAN — (*hurt and mournful*) A sweet daughter and a sweet welcome home in the dead of night.(*beginning to boil*) Old goat! There's respect for you! (*angrily — starting for the front*

door) Crazy billy goat, is it? Be God, I'll learn you manners! (*He pounds on the door with his fist.*) Open the door! Open this door, I'm saying, before I drive a fist through it, or kick it into flinders! (*He gives it a kick.*)

JOSIE — It's not locked, you drunken old loon! Open it yourself!

HOGAN — (*turns the knob and stamps in*) Drunken old loon, am I? Is that the way to address your father?

JOSIE — No, It's too damned good for him.

HOGAN — It's time I taught you a lesson. Be Jaysus, I'll take you over my knee and spank your tail, if you are as big as a cow! (*He makes a lunge to grab her.*)

JOSIE — Would you, though! Take that, then! (*She raps him smartly, but lightly, on his bald spot with the end of her broom handle.*)

HOGAN — (*with an exaggerated howl of pain*) Ow! (*His anger evaporates and he rubs the top of his head ruefully — with bitter complaint*) God forgive you, it's a great shame to me I've raised a daughter so cowardly she has to use a club.

(II — 893-894)

娘でありながら父親を父親とも思わず、ことばでも腕力でも、ホーガンはジョージには敵わない。大柄な体のジョージに向かって、敵いもしないのに、「膝の上に乗せてケツをひっぱたいてやる！」と凄むが、ジョー

ジーは負けずに、ほうきの柄のはしで、ホーガンの頭の剥げているところをたたく。最後は、ホーガンが負け、ジョージに従う。こんなやり取り、また暴力も二人にとっては、ゲームとして楽しんでいるかのようにさえ感じる。まさに息の合った漫才コンビである。これだけを見ていると喜劇のようにさえ思えてくるが、それは内面的複雑さを覆い隠すかのようなのである。

ジョージは、ティロンの罪を許す母としての役割を果たすが、女性としてティロンとの愛を成就することができない。一方、ジョージとホーガンは、罵り合い、さらには暴力へとエスカレートするが、ユーモアさえ感じさせる。ジョージとティロンの関係が陰であれば、ジョージとホーガンの親子関係は陽で、陰と陽のバランスを上手く取っている。

5

以上、ジョージの人物像、恋人ティロンとの関係、また父ホーガンとの関係を考察した。オニールは、どのような女性としてジョージを描きたかったのか。

外見的には、奇形と言われるような大柄で不恰好で、ことば使いも乱暴で、腕力もあり、とても理想といえるような良妻賢母型女性ではない。しかし、内面的には、繊細で相手を思いやるような暖かい人間味ある理想の母親像としての女性である。

恋人ティロンに対して、母親としての役割を果たし、母の霊、罪、苦悩から解放してやることはできても、恋人として女性として、ティロンとは心や肉体の結びつきはできない。ティロンに対しての健全な愛は、精神と一致した肉体の愛を望む純粋な愛であるが、叶うことはない。その愛を封じ込め、自分を

否定し、母親としての愛へと変化させる。「ジョージは、自分とジェイミーに生を与えたかもしれないが、それは『墓にまたがった』生である。」(Hall 51) 最後、ジョージは、「ねえ、ジム。もうすぐ、望みどおりに、眠ったまま死んで行っておくれ。いつまでも、罪が許され、安らかに。」(IV-946) と、ことばを残し家の中に入って行く。ティロンは母の霊から解き放たれ、死に向かうものの彼の心は救われる。しかし、ジョージのティロンへの女性としての愛は実らない。Haasの指摘するように、「ジョージはジェイミーより、より悲劇的であろう。」(Haas 131)

オニールの作品では、母親の存在が大きな影響を与える。母親は家庭の中では、大きな安定した柱である。その柱が欠けると家庭は崩壊の道をたどる。たとえ、母がいても、母親としての役割を果たさないと同様の結末となる。そのよい例が、*Mourning Becomes Electra*である。娘のラヴィニアには母クリスティーンはいるが、彼女にとってラヴィニアは憎しみの子であって愛することはできない。ラヴィニアもまた母を敬愛することはできない。二人は、互いに同じ男性を愛し、母を愛する弟オリンに母の愛人であり、ラヴィニア自身も愛する男性ブランドを殺害させる。物理的に存在する母はいても心を通わすことのできる母はいない。それは悲劇への道を辿る。

ティロンとジョージの束の間のロマンスは、彼がジョージを娼婦のごとく扱おうとしたことで、台無しになってしまう。オニールは、母親のような愛を求めるが、それはまたティロンのように、娼婦のような女性と混同してしまうのかもしれない。オニールの理想とする女性の中には、さまざまなものが混在してしまう。古木は、次のように述べている。「実の母であるメアリーは、彼にとっ

て愛情を求める対象にはなりえず、彼女のモルヒネ中毒は『娼婦』的イメージを、彼に思い起こさせてもいる。そのような描写を見る限りにおいては、実は『母親』像と『娼婦』像は、ジムの内面世界でも混同し、混在しているのではないだろうか。」(古木 17) モルヒネで苦しんでいた実の母から、真の母親の愛を受けることができなかつたオニールにとって、「母親」とは、永遠の課題であつただろう。そのためにあらゆるものが混在してしまう。また、長田も次のように分析をする。

オニールには理想的な母親体験はなかつたものと想像されます。幼児期から少年期にかけての不安定な母子関係は、安定した「至福体験」をオニールは許さなかつたはずです。不安定な母子関係は、不安定な「至福」の記憶だけをオニールに残し、オニールは後年その欠落した母親との「至福体験」をさまざまな女性像を通してもとめた可能性があります。(長田 40)

それを裏付けるように、カーロッタ夫人は、あるインタビューで、次のように語っている。

And he never said to me, "I love you, I think you are wonderful." He kept saying, "I need you. I need you. I need you." And he did need me, I discovered. He was never in good health. He talked about his early life — that he had had no real home, no mother in the real sense, or father, no one to treat him as a child should be treated — and his face became sadder and sadder.

(Falk 34-35)

ジョージはティローンと別れ、また家庭の中に入り、父との二人の生活に戻って行く。それは、家に縛られ、永遠に処女のままである。「性的結びつきの否定」(Shaughnessy 184)である。アビーとエベン は性的な結びつきを通し、母の亡霊から解き放たれる。しかし、最後、アビーはエベンとの間にできた子どもを殺害することで、保安官に連れられていく。

オニールの作品中の男たちは、娼婦に安らぎを求めるが、性的な関係を望んではいない。女性を愛しても、母親の愛を求めているかのようなのである。カーロッタ夫人が語っているように、妻である彼女に、"I love you, I think you are wonderful!"という愛のことばをかけたこともない。

ここに、オニールの求める女性が浮かびあがる。母のような愛が与えられる女性であるが、性的結びつきができると、それはもう娼婦になってしまう。母のような愛も、長田が指摘するように、オニールには実体験がなく、何が母の愛なのかも自覚できない。常にさまざまなものが混在する。そのため、つかみどころのない女性となる。また女性が、愛に走ることは許されない。すなわち、性的結びつきは否定しているかのようなのである。ジョージのように、外見的美しさは問題ではなく、いつまでも処女であり続け、母のように大きく包みこみ、家庭に入り、常に夫のそばにいて、夫を助ける女性を理想としているのではないだろうか。また、そんな女性をジョージの中にオニールは描きたかつたのではないだろうか。

2009年度第45回片平会夏期研究会にて発表したものを加筆修正しました。

Notes

- 1) テキストは, *A Moon for the Misbegotten*, in ed., *Complete Plays 1932-1943* (New York; Literary Classics of the United States, 1988.) を使用した。引用はすべてこの版による。
- 2) テキストは, *The Great God Brown*, in ed., *Complete Plays 1920-1931* (New York; Literary Classics of the United States, 1988)を使用した。引用はすべてこの版による。
- 3) テキストは, *Desire Under the Elms*, in ed., *Complete Plays 1920-1931* (New York; Literary Classics of the United States, 1988)を使用した。引用はすべてこの版による。

Works Cited

- Gelb, Arthur and Barbara. *O'Neill*. (New York: Dell Publishing Co., Inc., 1960)
- Dubost, Thierry. *Struggle , Defeat or Rebirth: Eugene O'Neill's Visions of Humanity*. (Jefferson, North Carolina: McFarland & Company. 1997)
- Falk, Doris V. *Eugene O'Neill and The Tragic Tension: an interpretive study of the plays*. (New Jersey: Rutgers U.P.,1958)
- Falk, Doris. "*Fatal Balance: O'Neill's Last Plays*". Bloom, Harold ed., *Eugene O'Neill: Modern Critical Views*. (New York: Chelsea House Publishers, 1987)
- Hall, Ann C. *A Kind of Alaska: Women in the Plays of O'Neill, Pinter, and Shepard*. (Illinois: Southern Illinois

U.P. 1993)

- Hass, Rudolf. "A *Literary- Historical Assessment of O'Neill*"(1968). Frenz Horst and Tuck,Susan. *Eugene O'Neill's Critics: Voices from Abroad*. (Illinois: Southern Illinois U.P., 1984)
- 古木圭子. 『日陰者に照る月』のジョージ・ホーガン, ユージン・オニール特集Ⅱ (全国アメリカ演劇研究者会議. 法制大学出版. 2002)
- 長田光展. 『オニールと女性 - 女性の意味するもの』. (中央大学人文科学研究所, 2007)
- Raleigh, John H. "*The Irish Atavism of A Moon for the Misbegotten*". Floyd, Virginia ed., *Eugene O'Neill: A World View*. (New York: Frederick Ungar Publishing Co., 1979)
- Shaughnessy, Edward L. *Down The Night And Down The Days: Eugene O'Neill's Catholic Sensibility*. (Indiana: U. of Notre Dame P., 2000)